

みちのく庄内・最上の森・里・川・海！ あるもの探しから始まる暮らしと農山漁村づくり



NPO法人 里の自然文化共育研究所
Institute of Collaborative Education for Sustainable Rural Communities, NPO

出川 真也
Shinya Degawa

多面的・公益的機能の発揮

(水涵養、農産物の供給、ふるさとの原風景(癒し)、地球温暖化防止機能.etc)

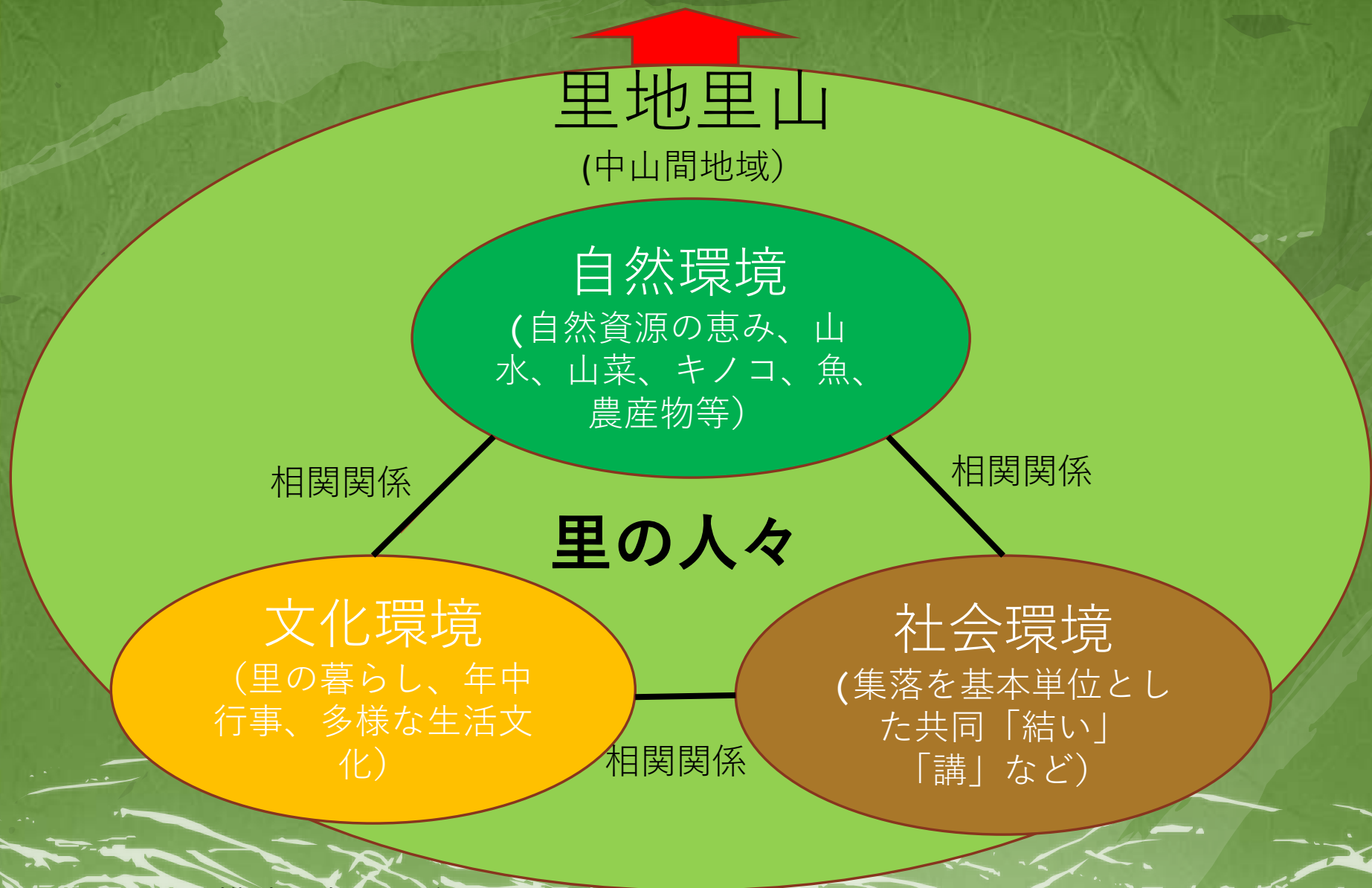


図1:里地里山構成の相関関係

里づくりの第一歩は地域のことを見つめなおすこと

知恵と風習が宝もの。自然と文化を学び、教えることで地域再生

山形県最上郡戸沢村角川地区全景



50km

地元学

～まずは地域の「あるもの探し」からはじめよう～
子どもから大人まで地域住民とヨソモン参加で実施



地元学～聞いて、見て、やってみて、調べる～

子どもも大人もじいちゃん、ばあちゃんも楽しくなる



地元学で発見された水辺の生き物達



地元で再発見された郷土料理の数々



地元学（地域の環境文化調査）

皆で発表会、調べたものを地図にまとめて今後の活動を話し合う。
集落の将来の夢を語り合いました。



子供から大人、じいちゃんばあちゃんまでみんなで語り合いました。

地元学の成果物

- 地域マップ
- 地域資源カード
- 地域の歳時記

以上からこれからの地域づくりを考えた。

里地里山の地域と連携する活動作りのポイントとは？

まずはよく地域を調べること、地元の方の話によく耳を傾けること。ここから始まる。

□ (1) 住民主体の地域計画作り

(ヨソモンの目線の違いを活用した地元学調査とヴィジョン作り)

□ (2) 日常生活に立脚したプログラムとカリキュラム作り

□ (3) 里の何気ないありふれた素材を力づける

(保全と伝承、再創造、再活用、そしてコミュニティビジネスへ)

□ (4) 人材育成 (担い手育成)

そこにすんでいるおじさん、おばさん、じいちゃん、ばあちゃんが元気に暮らすことが一番の人材育成。そこに若者は引き寄せられてくる (かもしれない)。

問題や課題は地域にあるが解決策も地域にある。

しかし、それよりも地域にある価値を受け継ぎ革新していくというスタンスが大切。

地元学後の展開方向の事例

農山漁村が自律的に持続可能な暮らしを形成する
取り組みとなることが大切

- 自律的な活動運営のしくみと人材育成体制の形成
- 地域環境の保全と伝承
- 地域特性を生かしたコミュニティビジネスの推進
- エコツーリズム・グリーンツーリズムの展開

祭り・行事

お手伝いツアー
ワーキング・ホリデー

仕事

山、畑、田んぼ
など

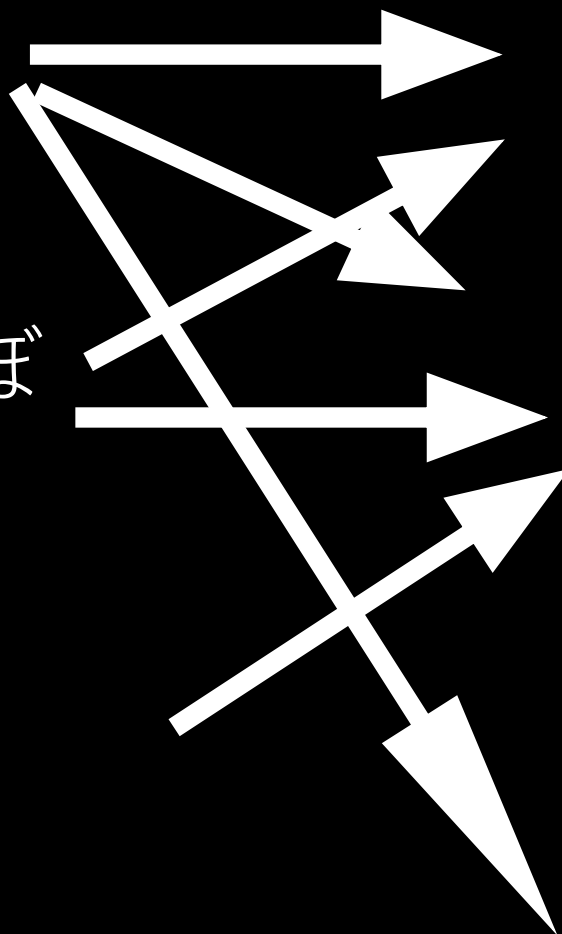
参加・体験

遊び・楽しむ

川や山での
魚釣り、泳ぎ、
山歩き、山菜とり
など

見る・眺める
聞く

地域に根ざした手作り地域産品



月川里の自然環境学校・

山村資源と山村の日常の暮らしを生かして、ふるさと学習活動による人材育成、産品開発、ツーリズムを開発し実践。



森里川海をつなぐ農山漁村暮らし再生プロジェクト

～NPO法人里の自然文化共育研究所「森里川海共育プラン」～



農山漁村の広域連携・多主体連携、そして都市住民との協働

海の拠点
(飛島)
離島の漁文化
と暮らし

海の拠点(酒田市)
海の地元学
と食文化交流

川の拠点(最上峡)
森林再生と
川の体験活動

海辺の拠点(三瀬)
海辺の地元学と
自然体験・保全活動

しな織の里
伝統工芸品
と里山研修

山・里拠点(角川の里)
里地里山保全活動

都市部(山形市・仙台市)
青少年体験活動市民団体
との連携

里づくり活動をより広域に、より多くの
人々との協働で進めていこう！

活動の広がりと深まりを目指して最上・
庄内地方・仙台都市圏を里地里山活動でつ
なぎます。



森

里山保全活動
知恵・技術の伝承、
森林環境教育を展開



里

**鶴岡市松ヶ岡はじめとして
庄内最上地方12か所で
地元学活動を展開**



川～最上峡を中心とする川漁文化伝承と観察会・保全活動



地元の川漁師と生き物調べ



最上峡をカヌーで探検



水質調査



川面から最上峡の川と森林観察

海～海辺の集落の地元学と自然文化交流～

山村の高校生が海辺の森林ボランティア活動



海辺の地元学を
実施！



海の中の地元学！
漁船体験



山村の住民と海辺の
住民が食文化交流会
を実施



コミュニティビジネス広域連携ネットワーク 最上庄内エリア関係団体位置図

ー地域活動団体を介したツーリズム拡充と産品販売促進網構想ー



森と海の宝地域の力に

戸沢村角川地区の住民が九、十の両日、酒田市飛島を訪れ、法本地区の住民と交流した。森の角川と海の飛島の住民同士が、互いの宝を探し出し、地域活性化の足掛かりにしようとの試み。初の交流となった今回は、互いに郷土料理を出し合い、味わうとともに、意見を交換した。

角川地区の自然環境学習グループ「角川里の自然環境学校」（斎藤久一代表）では、住民が「里の先生」となり、地元の文化や伝統などを次世代に伝えている。二〇〇六年からは同学校の研究部が、活動に広がりと深みを持たせようと、他地域に出掛けて調査活動を行っており、去年、メンバーが飛島に行つて県漁業協同組合飛島支所女性部（斎藤栄子部長）と交流。その後、今回の話がまとまった。



郷土料理出し合い、意見交換

交流活動には、同
 学校研究部 年
 た特定 利 法
 ○法人「里 然
 研究所」(大 理
 同 性 部 関 約
 参加。 下 会 関
 の 理 会
 た 民 主 物
 た きの の 料
 の 対 し、 鳥 側
 の 動 作 や エ
 と 露 した。
 島 では 間
 名。そ トラ
 の 郷 土 理 作 り に 日
 利用 して も つ づ け
 と、 四 十 五 分
 各 々 の 炭」と「海 の 魚 介 類」を 媒 介 と する
 里 の 森 の 炭」と「海 の 魚 介 類」を 媒 介 と する
 出 川 真 実 務 事 は 一 緒 に な っ て 交 換 経 済 づ け
 が 一 緒 に な っ て 交 換 経 済 づ け
 れ る 力 に 可 能 と 感 じ
 業 化 に 向 け、 魚 川 の
 島 の 魚 を 用 い た レ シ
 し て は ど う か と い っ
 ア が 出 て い た」と 話

森・里・川・海・都市をつなぐ地域づくりーふるさと資源による暮らし再生プロジェクトー
(山形県最上地方・庄内地方)ーNPO法人里の自然文化共育研究所 他6団体ー

